Learning Assistant
LA活動報告

「LA、全国へ向けて発信!」

2012年2月25日・26日に追手門学院大学で開催された「学生FDサミット」において、本学LA（Learning Assistant）の岩尾咲子さん（文学部2年）、榎本慎也さん（環境都市工学部3年）、國谷みなみさん（政策創造学部3年）、橋本光太郎さん（システム理工学部3年）の4名がLAの取り組みについて発表しました。

発表の準備に取り組むLA

「学生FDサミット」は年2回開催されているイベントで、全国のFDに関わる学生スタッフや教職員が一堂に会する場です。今回は全国56大学から340名が参加したということで、関西大学LAの取り組みが全国の大学に広く周知される契機であったといえます。

発表では、4名のLAが普段の業務で培いつづけているプレゼンテーション能力を遺憾なく発揮し、参加者に業務内容や業務への熱い思い（「知的探求の面白さを伝えたい!」など、それぞれのLAが持つ「野望」）を伝えました。

限られた時間でしたが、それらの熱い思いは参加者にも伝わったのではないでしょうか。発表後にあった懇親会などで「私の大学でもやってみたい!」「制度として開始するまでにどんな準備だったか」など、全国の学生や教職員から問い合わせを頂いたことからもうかがえます。

今回の発表に至るまでの準備はLA自身が主体的に行いました。LAの業務内容は担任者や科目の特性により多様であり、4名のLAであっても「4者4様」といえます。このような状況の中で発表内容の合意形成は容易ではなかったかもしれません。しかし、彼ら彼女らは納得いくまで議論を重ね、その結果、LAとしての全体性を説明しつつも多様性も活かすという素晴らしい発表内容になりました。このように、学内にとどまらず学外でも活躍しつつあるLAをCTLとして応援し続けていきたいと考えております。

（CTL事務局）

340名の前で発表する4名のLA

「ＬＡ、海外でも活躍!」

この度は同じくLAの堀尾裕一さん（社会学部3年）と共に課外活動の一環として、台湾で開催された国際学会「TELDAP2012」の運営スタッフを務めてまいりました。学会の2日前から学会会場でスタッフのための研修を受けた上で、学会の設営を手伝いました。TELDAP 2012は、情報通信技術（ICT）を中核として、自然科学や教育など様々な分野の発表が様々な国籍の発表者によってなされる学会です。すべての会議は中国語と英語の同時通訳で行われました。

学会中は専任スタッフ同様に学会運営業務を担当しました。本学でも日常的にLAの業務の中で、プロアクティブに行動することを実践してきていたので、学会主催者のサイモン教授からも仕事ぶりをほめてもらうことができました。学会責任者の期待以上の仕事ができました。学会中は英語だけでのコミュニケーションでしたので、たいへんでしたが、貴重な体験をすることができました。

学会中は発表会場内で登壇者からの著作権譲渡の書類作成補助、登壇者のIT活用サポート、学長のサポート業務などをおこないました。おかげで、さまざまな分野の最先端の発表を聞くことができました。

今世界が、どんなアプローチで、何を生み出そうとしているのか。一方私たち学生はこれら情報技術と共に「何が出来るのか」。新学期は、今回の課外活動での体験を、受講生の皆さんと共に考えるきっかけとして共有していきたいと考えております。

（LA・政策創造学部2年　中村薫平）

セッションで座長補佐を務めるLA
（左：堀尾、右：中村）

寺崎昌男客員教授講演会を開催しました

日時：2011年12月16日（金）16：20〜17：50
場所：千里山キャンパス第2学舎　C403教室

FD・SDの新しい局面 —「教職協働」そして大学院FDを考える 大学の教職員を志す学生に知ってほしいこと—

2011年12月16日、関西大学客員教授寺崎昌男氏による標記演題の講演があった。氏は大学を巡る大きな変化として、教職員・学生・卒業生全てを含んだ総合的な力量が求められること、ピラミッド型序列の中の“one of them”を脱し、独特の個性を有する“only one”たるを求められること、超少子化への対応が不可避であること、主に以上の三つが眼前にあるのを踏まえた上で、大学教育を見直すための視点についてお話をされた。

学生の自学心をどのように喚起するかが現在の大学教育の課題である。学生が自学心を十分に持てない理由は単一ではないが、学生の自学自習を求めない大学教育の在り方に問題がある。最近ではactive learningやdeep learningなど、学生自身の考察を促し、何を学ぶべきかを理解させる工夫のある授業が展開されているが、その効果的な運営が教師にとっての新たな課題であり、FDの新しい局面である。大学の授業科目（course）は学生にとっては「歩く道」である。教師はこれを先導し、あるいは伴走する存在である。このように捉え直した時、active learningやdeep learningにつながる道筋が見えてくる。同時に学生がFDにおける重要な協力者となってカリキュラム作りに参加することも可能となる。なお大学院のFDについては大学院教育の指南書のない我が国では教育・指導の意味を見直すことこそが新たな出発点となる。

SDについては、その浸透、発展に見合うカリキュラムがない。カリキュラムには広がり（scope）と順序（sequence）が不可欠であるが、職員に様々な部署を渡り歩かせる広がりはあっても、知識や技能の蓄積は経験に任せるばかりになっている。したがって計画性あるカリキュラムを編む必要がある。また職員は学生にとって最も身近な年長者であり、彼ら彼女たちのキャリアモデルとなることを失念すべきではない。

FD・SDともに新しい局面を迎えること必至であるが、肝要なのはいずれも大学の日常の活動の中に自然に溶け込み、文化となることである。教員と職員が車の両輪に例えられることしばしばであるが、車軸をどうやって作るか、そこに駆動力を如何に伝えるか、二つの車輪がどの方向に進んでいくのか、そのことに目を向けるべきである。教員は最終的に全国および国際学会の水準に到達するという宿命を帯び、職員は全てのことについて何事かを知り、いくつかのことについては全てを知ることが求められるが、両者が相互にミッションを理解した上で協働が可能となる舞台を見据え、大学の多機能化に応えていく必要がある。その舞台としてカリキュラム・マネジメントが考えられるが、協働の場としての機会は自校教育に大きい。以前に比して大学と学生のつながりが希薄となった今、自校教育の意義はさらに大きい。

寺崎客員教授による講演の様子

大学は知識と情報を与えるが、イマジネーションをかき立てる方法で伝えることこそが肝要である。大学の社会的機能は確かに多様になっているが、伝え方の基本を忘れてはならない。

（教育推進部　三浦真琴）